

令和元年6月20日現在

機関番号：27103
 研究種目：基盤研究(B) (一般)
 研究期間：2016～2018
 課題番号：16H03395
 研究課題名(和文)「ホームランド」の政治学 アメリカ文学における帰属と越境の力学に関する研究

研究課題名(英文) The Politics of "Homeland": A study of the Dynamics of Border Crossing and Belonging in American Literature

研究代表者
 小谷 耕二 (KOTANI, Koji)
 福岡女子大学・国際文理学部・教授

研究者番号：40127824
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、九州の7名の研究者による共同プロジェクトであり、アメリカ文学を時代、地域、文学ジャンルを横断して考察し、ホームランドに内在する政治学を考察したものである。アメリカ文学に見られる越境と帰属の様相に焦点をあて、アメリカのナショナル・アイデンティティの形成、変容、解体、再構築のプロセスにどのような政治性が作用しているかを明らかにすることが当初の目的であった。取り上げたのは、ソロー、トウェイン、フォークナー、カレン・テイ・ヤマシタ、ギレルモ・ヴェルデッキア、アメリカSF映画などであり、最終年度には『ホームランドの政治学 アメリカにおける帰属と越境』と題する論文集を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

9.11同時多発テロ以降のブッシュ政権の「対テロ戦争」から今日のトランプ政権にいたるまで、守るべきものとしてのホームランドにたいする意識の高まりが持続している。ところが、こうしたナショナリズムの隆盛の一方で、人や物や情報のボーダーレスな流通や拡散により国境の揺らぎともいえる現象も出現している。このような状況のもとで、「アメリカとは何か」という古くからの問いを新たに再検討し、従来のナショナル・アイデンティティの形とは異なる新たなアイデンティティの形を模索している。

本研究は「ホームランド」という新しい視点からアクチュアルな問題に取り組んでおり、その意味で学術的、社会的意義を有すると思われる。

研究成果の概要(英文)： The present study, a joint project in which seven researchers in the Kyushu district joined together, is an investigation of the politics of homeland in American literature. Focusing on the issues of "border crossing" and "belonging," we tried to clarify what politics were working in the process of the formation, transformation, disintegration, and reconstruction of American national identity by examining several writers of the various periods, areas, and literary genres in American literature with "homeland" as a keyword. The writers and subjects taken up were H.D. Thoreau, Mark Twain, William Faulkner, Karen Tei Yamashita, Guillermo Verdecchia, and American SF films. As an achievement of our studies, we published a collection of essays titled The Politics of Homeland: Border Crossing and Belonging in American Literature.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 アメリカ研究 ホームランド ナショナル・アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

本研究は「ホームランド」をキーワードとしてアメリカ文学を考察したものである。9.11同時多発テロ以降のブッシュ政権による「対テロ戦争」から現在のトランプ政権の排外的政策志向にいたるまで、守るべきものとしての「ホームランド」にたいする意識の高まりが持続している。ところが、こうしたナショナリズムの隆盛の一方で、人や物や情報のボーダーレスな流通や拡散により国境の揺らぎともいえる現象も出現している。このような状況のもとで、どのような形のナショナル・アイデンティティが可能なのか、それを模索するために、「アメリカとは何か」という古くからの問いを新たに再検討してみようというのが、本研究の趣旨であった。

2. 研究の目的

上記の通り、ナショナリズムの求心力とグローバリズムの遠心力という、相反すると思われる力が同時に作動している現在の世界にあって、アメリカのナショナル・アイデンティティはどのような形で存在しているのか。それを文学作品の分析を通して見定めることが本研究の一つの目的であるが、そのためにアメリカのナショナル・アイデンティティは歴史的にどのように形成され、変容してきたのか、地理的な要因にどのように影響されているのか、また文学表現にどのような形で表出しているのか、といった問題群を検討することとした。

3. 研究の方法

研究の性質上、文献研究が主たる作業であり、海外出張を含めて関連資料の調査・収集、対象テキストの読解などを研究方法とした。共同研究メンバーの個別研究が主となっているが、メンバー間の意見交換や研究報告のため、全体の研究会や、公開ワークショップおよび学会シンポジウムの企画・実施も行った。

ナショナル・アイデンティティの問題はホームランド言説に集約的に現れるであろうとの判断から、共同研究の各メンバーがみずからの専門領域の作家や作品を取りあげるさいに、ホームランドを研究のメインテーマに据えることにした。ただし、ホームランドという主題は必然的に、広い意味でのホームという空間、境界・帰属・越境、ディアスポラ、ネイティヴィズム、トランスナショナリズム、複数言語などの問題領域に密接に関連しているので、論述の視座や方法は各メンバーに任せて、自由に論じてもらうことにした。

4. 研究成果

各メンバーはそれぞれの専門領域で本研究ならびに関連する個別研究を行い、学会での研究発表や学術雑誌などでの論文掲載といった形で研究成果を発表しているが、最終年度に共同研究の成果として『**ホームランドの政治学 アメリカ文学における帰属と越境**』という論文集を刊行したので、ここではその内容について述べておく。

岡本太助「パフォーマンスによるボーダーランドの再地図化 アメリカン・ホームランドの辺境における観測」は、アルゼンチン出身カナダ在住の劇作家兼役者ギレルモ・ヴェルデッキアの短編集『市民スアレス』と演劇『フロンテラス・アメリカナス』を中心に切りあげ、いわば現在形のホームランドの状況、およびそこでの新たなアイデンティティ形成の可能性を論じている。岡本は、絶え間ない変化や移動というボーダー状態を自らの居場所として新たに選び取ることで、そこに定着するのでもなく、またそこから切り離されて浮遊するのでもない逆説的なホームランドが生まれる可能性を探っている。

高橋勲「モールス信号の政治学 ソローと 19 世紀ネイティヴィズム思想」は、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの『ウォールデン』と『コッド岬』を取りあげ、ソローの郷土愛・愛国心、保守的心理と偏狭性について論じている。高橋によれば、アメリカ・ルネサンス文学の背後には、アメリカとは何か、アメリカ人とはだれなのか、というナショナル・アイデンティティの問題があったのだが、当時のナショナル・ナラティブによるナショナリズムの発現という時代を背景として、ホームランドという視座からソローを読み直すと、ニューイングランドの文化風土を理想化したネイティヴとしてのソローの矜持や偏狭さ、さらには当時のネイティヴィズムが見えてくるのだという。

竹内勝徳「イノセンツ・アブロード」にみる虚構のホームランドは、そこにアメリカの植民地主義的傾向を読みとる者と、逆にむしろそこに反帝国主義を見てとる者との意見が対立している、マーク・トウェインの『イノセンツ・アブロード』を取りあげている。竹内は、この作品の複雑な語りの二重性の分析から、トランスナショナリズムとホームランド的なナラティブが奇妙にも結託する構造の存在を指摘し、それがこの作品に相反する解釈が生じている所以だと主張している。

小谷耕二「フォークナーにおける〈境界〉とホームランド」は、フォークナーの『行け、モーセ』と『墓地への侵入者』を取りあげ、作中の主要人物がそれぞれどのようにカラーラインを越えているかを考察したものである。小谷は、アイク・マッキヤスリンが身体性が捨象された抽象的なホームランド幻想を抱くのにたいして、身体の言語により心の真実を理解するチック・マリソンは具体的、身体的なホームランド像を呈示しており、それは混血ルーカス・ビーチャムのホミ・バーバ的「擬態」による「第三の空間」に通じる可能性を秘めているのではないかという仮説を提出している。

喜納育江「カレン・テイ・ヤマシタのホームランド」は、カリフォルニアを生まれ故郷としつつ、そこで共存してきた日系人以外のコミュニティを、日系三世のヤマシタがどのようなまなざしで捉え、表現しているのかを、ヤマシタの『サークル・K・サイクル』と『I ホテル』を通して考察したものである。喜納によれば、ヤマシタは「定着」や「純粋さ」よりも「移動」や「混淆」を人間存在の現実とみなし、したがって定着せず混淆を受け入れることでアイデンティティの固定化に抵抗することが可能になるのであって、そこに可変的で、遍在的なものとしてのホーム／故郷が呈示されることになるという。

高野泰志「空飛ぶ円盤ホームランドを襲撃す」は、H. G. ウェルズの『宇宙戦争』をはじめ

としてイギリスで書かれた「侵略物語」が、アメリカの SF 映画として繰り返し制作、脚色、語り直しされていくプロセスを見ることで、そうした作品群がいかなる不安のもとで生まれ、いかなる不安を招いていったかを確認し、アメリカの大衆の抱く母国／家族にたいする意識がいかに変容していったかを論じたものである。高野はアメリカの SF 映画の背後に、地球が宇宙人に侵略される不安、さらにはアメリカが共産主義国家に侵略され感情や自由を奪われてしまう不安を指摘し、その不安が他者／他国を侵略したいという欲望の裏返しだと指摘している。

こうして見てくると、研究対象の多様性にもかかわらず、そこにある共通点を見いだすことも可能である。先住民を別として、アメリカは移民の国であるから、その成り立ち上アメリカ人は基本的にハイフン付きアメリカ人であり、〇〇系アメリカ人という二重性を刻印されていると言えるだろう。そうしたなかで、従来二者択一的にそのハイフンの前後どちらかに比重を置くことによって、そこに排除と包摂の力学が作動していた。しかしながら、とくに国境の概念が揺らいできた現在、その二者択一を無効化する存在のありようの可能性が模索されはじめているのかもしれない。移動や混淆をみずからの居場所として選ぶという、固定化されないアイデンティティ形成は、従来の自己と他者を峻別することによる固定的なアイデンティティ構築とは異なるものであり、それがアイデンティティの絶えざる更新可能性の契機ともなりうるのではないかということを示唆しているように思われるのである。

5．主な発表論文等

[雑誌論文]

高橋勤、背後の自然 『ウォールデン』再読、英語英文学論叢、査読無、No. 67, 2017, pp. 1-18.

竹内勝徳、情動の創造性 アフェクト理論による『白鯨』分析、スカイホーク、査読有、No. 4, 2016, pp.5-22.

岡本太助、シェパード劇における表出的アイデンティティ、アメリカ演劇、査読有、Nos. 28・29, 2018, pp. 35-57.

[学会発表]

高橋勤、野性の文化論 ソローからレヴィ＝ストロースへ、日本英文学会九州支部第 69 回大会、2016 年 10 月 23 日、中村学園大学

岡本太助、山本秀行、穴田理恵、古木圭子、「記憶の精確な座標」 Guillermo Verdecchia 劇における転移と越境、日本アメリカ演劇学会第 6 回大会シンポジウム、2016 年 9 月 11 日、エスカル横浜

下條恵子、Discovery of the Self P. オースターと自伝、九州アメリカ文学会第 62 回大会、2016 年 5 月 7 日、九州大学伊都キャンパス

竹内勝徳、横田正夫、庄司宏子、新田啓子、文学／映像における情動の再定位、日本英文学会第 88 回全国大会シンポジウム、2016 年 5 月 29 日、京都大学

Katsunori Takeuchi (竹内勝徳)、Two Godzillas: Transpacific Movements and Deterritorialization, International Paper Presentation on Japanese and Filipino Studies (国際学会)、2017 年 2 月 23 日、鹿児島大学

岡本太助、初期アメリカ演劇と「ホームランド」の力学、九州アメリカ文学会第 63 回大会、2017 年 5 月 13 日、佐賀大学

岡本太助、「アメリカ演劇」の生成 二人の Guillermo によるボーダーランドの再踏査、日本アメリカ文学会第 56 回全国大会、2017 年 10 月 3 日、鹿児島大学

下條恵子、19 世紀アメリカー「リスクマネジメント概念の 上陸」、九州アメリカ文学会公開ワークショップ「アメリカ文学とホームランド」、2017 年 8 月 18 日、九州大学西新プラザ

竹内勝徳、『信用詐欺師』におけるホームランドとネイティヴィズム、九州アメリカ文学会公開ワークショップ「アメリカ文学とホームランド」、2017 年 8 月 18 日、九州大学西新プラザ

喜納育江、人新世と『他者』：抵抗の視座としてのジェンダーと文学、日本英文学会第 69 回中部支部大会シンポジウム「人新世への応答」（招待発表）、2017 年 10 月 28 日、福井大学

小谷耕二、フォークナーと＜境界＞、九州アメリカ文学会第 64 回大会シンポジウム「アメリカ文学と＜境界＞」、2018 年 5 月 13 日、北九州大学

岡本太助、A Haunted Theater あいまいなものとしての境界、九州アメリカ文学会第 64 回大会シンポジウム「アメリカ文学と＜境界＞」、2018 年 5 月 13 日、北九州大学

岡本太助、Edward Albee の家族ゲーム 演劇的イリュージョンとしてのホーム、日本アメリカ演劇学会第 8 回大会シンポジウム「Edward Albee の詩学」、名古屋市 HOTEL ルブラ王山、2018 年 8 月 26 日

下條恵子、Revisioning America, Revisioning Self: Paul Auster's Autobiographical Works, The 53rd American Studies Association of Korea International Conference(国際学会)、2018 年 9 月 14 日、Korea University (韓国)

竹内勝徳、*The Innocents Abroad* における国家イメージの反転、九州アメリカ文学会第 64 回大会シンポジウム「アメリカ文学と＜境界＞」、2018 年 5 月 13 日、北九州大学

[図書]

高野泰志、下半身から読むアメリカ文学、松籟社、2018 年、403 頁

小谷耕二、岡本太助、高橋勤、竹内勝徳、喜納育江、牧野理英、高野泰志、ホームラン

ドの政治学 アメリカ文学における帰属と越境、開文社出版、2018年、286頁
竹内勝徳、倉橋洋子、高尾直知、竹野富美子、城戸光世ほか、繋がりの詩学 近代ア
メリカの知的独立と<知のコミュニティ>の形成、彩流社、2019年、361頁
竹内勝徳、川津雅江、吉川朗子ほか、トランスアトランティック・エコロジー、彩流社、
2019年（予定）
喜納育江ほか、*Approaches to Teaching the Works of Karen Tei Yamashita*、MLA、2019
年（予定）

6. 研究組織

高橋 勤、TAKAHASHI Tsutomu、九州大学大学院・言語文化研究院・教授、10216731
岡本 太助、OKAMOTO Tasuke、九州大学大学院・言語文化研究院・准教授、90523176
下條 恵子、SHIMOJO Keiko、九州大学大学院・言語文化研究院・准教授、30510713
高野 泰志、TAKANO Yasushi、九州大学大学院・人文科学研究院、准教授、50347192
竹内 勝徳、TAKEUCHI Katsunori、鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授、
40253918
喜納 育江、KINA Ikue、琉球大学・国際地域創造学部・教授、20284945